

# 白雲片片

## 第十四回

### 你、作麼生か会す

今回は前回に引き続き南陽慧忠禪師

(大証国師)、肃宗皇帝、そして耽源応

真禪師が登場する古則を紹介致します。

正法眼蔵三百則 第五百五十二則

「慧忠国師、因みに肃宗、師と宮前に到る。乃ち石の獅子を指さして云く、

陛下、この石の獅子奇なり、一転語を下

取すべし。帝云く、朕、下語すること

を得ず、請う師、下語すべし。師云く、

山僧が罪過なり。後に耽源の応真、師に

問うて云く、皇帝、還た会すや。師云く、

皇帝の会は且らく致く、你、作麼生か

会す。」

現代語訳／師は南陽慧忠禪師、帝は

肃宗皇帝、真は耽源応真禪師の事です。

肃宗皇帝と南陽慧忠禪師が、あるお宮の前に来た時の話です。南陽慧忠禪師がお宮にあった石の獅子を指さして

皇帝に言いました。

師「陛下、この石でできた獅子はなかなか良い姿をしております。この獅子について何か仏道の境地を示す

言葉を述べて頂きたい。」

帝「いや、私はこの獅子を見ても特に良い考えが浮かばない。ですから、和

尚さんがこの石の獅子について何か述べて頂きたい。」

師「これは私の責任だ(皇帝が答えられないのは私の指導が不十分だからだ)。」

それから時が経ち、耽源応真禪師が南陽慧忠禪師の元で修行をしていた頃、師匠に質問をしました。

真「肃宗皇帝は石の獅子について何も言わなかったようですが、皇帝は釈尊の教えを分かっていたのでしょ

うか、どうでしょうか。」  
師「皇帝が分かっていたかどうかという事はとりあえず置いておこう。ところで、お前は分かっていたのか。」

他人の事が気になるのは人の常だと思えますが、南陽慧忠禪師の教えによると、人の事よりも自分がどういう状態かを注意する必要がある、という事だろうと思います。誤解があつてはいけません、人の様子を気にしてはいけないとか、他人に興味をもってはならないとか、人の行いを参考にしてはいけないという事ではなくて、他人が何をしているのかを過度に気にしたり、人の噂話に花を咲かせているような余裕は我々にはない

という事を南陽慧忠禪師は言っておられるのだと思います。その根底には、我々の人生は一回しかなく、やり直しができないから、できるだけ早い段階で本気になって取り組まないと死ぬまでに間に合わないという切実な事情を踏まえているように感じます。また、人の事をあれこれ言っている暇があるのなら、自分自身が向上するために努力する、貴重な時間はそういうふうに使ったほうが良い、という事ではないでしょうか。

人の事より自分の事を常に気にしておけ、というふうな話になると、「それは小乗の教えではないのか」というふうな思われる場合がありますし、また「独りよがりの自惚れではないのか」と言われそうですが、そもそも仏教には最初から小乗や大乘の区別はなく、釈尊を初めとする祖師の行動には、はたから見ていると小乗と言えそうな行動もあつたし、大乘と呼べるような行動もあり、釈尊入滅後、後世の人たちが釈尊の行動や教えの、どの部分を強調したかによって分かれていった、という事に過ぎないと思います。そして、新しい事をいろいろ付け足していくうちに、どれが釈尊の

本當の教えで、どれがそうでないのかが分かり辛くなってきたのではないのでしょうか。

また、特に坐禅については自己の悟りを優先している行いと見られる傾向が少なからずあつたと思います。今もあるかもしれませんが、紙面の都合で詳しく書けません。妙法蓮華經の解説がされている正法眼蔵法華轉法華には、いわゆる小乗と呼ばれる「声聞乘、縁覺乘」、そして大乘と呼ばれる「菩薩乘」、これらは全て「一仏乘（坐禅）」に内包されているという主旨が示してあります。

道元禪師は弁道話の中で、「禪宗というのは坐禅宗の略称であり、壁に向かつて黙々と坐禅をする達磨大師を見た、仏法を知らない愚かな俗人が、達磨大師を蔑んだ呼称である」というふうな事を示しておられます。道元禪師の伝えた教えに従いますと、坐禅は仏道の全体であり、仏道Ⅱ坐禅、坐禅Ⅱ仏道ですから、わざわざ「禪宗」と標榜する必要は全然ないという事になります。

今日では便宜上、普通に禪宗と言いますが、むしろ禪宗と標榜する事によって、仏道には他にも正統なものがいろいろ

あるというふうな誤解を招く事にもなりかねないのではないのでしょうか。

現在でも葬儀や開眼供養等で円相を描く所作をしたり、書画として円相が描かれたものを目にする事がありますが、初めて円相を描いたのはこの古則に登場する南陽慧忠禪師だと言われています。そして南陽慧忠禪師から円相を伝授されたのが弟子の耽源応真禪師で、耽源応真禪師からそれを引き継いだのが瀧仰宗の祖のうちの一人である仰山慧寂禪師だと言われています。

それよりも少し古い時代、東土三祖の鑑智僧璨禪師が撰述した「信心銘」の中に「円（まどか）なることは大虚に同じく、欠くること無く余ること無し」という箇所があります。釈尊の境涯や教えを円の形で表現し、それを理想とする事はかなり古くからあつたようです。個人的には、円相は坐禅中の極めて安定した状態、及び私たちが生きていくこの世界が、欠けているところもないし余っているとすることもなく、表現し難いほど素晴らしいことを具体的に表したものでないかと思つています。参考文献／西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱中巻二」